

竹久夢二流デザイン手法の研究

高屋 喜久子[†]

A study on Yumeji Takehisa's Unique Way of Designing

Kikuko TAKAYA[†]

ABSTRACT

Yumeji Takehisa (1884-1934) was an artist and poet who exemplifies the Taisho Romanticism. His paintings of beautiful women, known as Yumeji *Bijinga*, had big influence on the fashion and culture of the subsequent modern art. He also did a lot of design for Japanese paper with colored figures, picture postcards, and accessories such as decorative collars on under-kimonos, and gained popularity. This study focuses on his graphic design works and attempts to analyze his unique way of designing.

Key Words: Yumeji Takehisa, Taisho Romanticism, graphic design, way of designing

キーワード: 竹久夢二, 大正浪漫, グラフィックデザイン, デザイン手法

1. はじめに

竹久夢二（本名：竹久茂次郎、明治17年～昭和9年、1884～1934）は、大正浪漫を象徴する画家・作家として広く知られる。夢二は詩人としてデビューした後、挿絵画家となり、美人画によって時代の寵児へと駆け上った。首を傾け、大きな黒い目におちよぼ口の郷愁に満ちた夢二の美人画は「夢二式美人」と呼ばれ、当時の女性たちの憧れでもあった。

活躍期の後半には、千代紙や絵葉書のデザイン、雑誌の表紙や本の装丁なども多く手掛けた。当時は、デザインという言葉や職業の概念がなかった時代である。商業美術や生活芸術と呼ばれる分野の仕事で活躍した夢二は、グラフィックデザインの先駆者とも言えよう。

大正3年（1914）夢二は、千代紙や絵葉書に加えて半襟などデザインした生活小物を、「港屋絵草紙店」で販売した。デザイナーズブランド夢二のアンテナショップとも言える日本橋の港屋は大人気を博し、少女達の憧れとして東京土産の代表格になったのである。

美人画に描かれる着物や帯の図案は、夢二独自のデザインによる洒落たものであり、夢二がファッションデザイナーとしての力量にも長けていたと言えよう。女性たちは、そのファッションを着ることを好み、憧れとした。また、夢二デザインの半襟柄が雑誌の付録に掲載されると、読者は好んでその文様やデザインを真似て刺繍したり染めたりした。女性たちが街で着ている姿を見て、夢二はとても喜んだという記録が残っている。

夢二は、詩人、作家、作詞家、画家、グラフィックデザイナー、ファッションデザイナー、インテリアデザイナー、そして夢二ブランドの

平成 30 年 12 月 10 日 受付

[†] 感性デザイン学部創生デザイン学科・教授

総合プロデューサーであったとも言える。彼は仕事と共に私生活の中でも、例えばカーテンや本のカバーも自分でデザインするという、こだわりようであった。明治後期から大正、昭和初期と三つの時代を横断した 50 年の生涯において、彼は「夢二流の美」を追求したと言える。

夢二生誕130周年を記念して「竹久夢二学会」が、約40人の研究者らによって2014年9月に設立された。創設を提案した岡部昌幸帝京大教授（近代美術史）は、「夢二には体系的な研究がない。全国に散らばる作品を調査し、まとめた。」と挨拶したことが、日本経済新聞2014年9月27日付に記載されている。夢二の学術的な研究が、数多くは存在していないことを示している。

高橋律子氏は『竹久夢二 社会現象としての<夢二式>』ブリュッケ（2010）においてⅠ<夢二式>の時代、Ⅱ<夢二式>に何をみたか、Ⅲ<夢二式>のモチーフとして、大正浪漫の時代に人びとの心を捉えた<夢二式>美人について、その表現と社会現象から流行の理由を探り詳しく纏めている。また、高橋『日本におけるアヴァンギャルドの萌芽—竹久夢二に内在する抒情と前衛』鹿島美術研究（2005）にも論考がある。小嶋洋子氏は、『竹久夢二における感情の諸相、さらなる夢二理解の可能性に向けて』（2012）博士学位論文にて、夢二式絵画における感情表現について論述している。以上は、美術史のあるいは社会的に、夢二の絵画作品を捕まえたものである。

デザインの視点を中心に、グラフィックデザイン先駆者としての夢二の功績に焦点を当てた学術研究は、見当たらない。そこが本研究の萌芽点になったと言える。本稿では夢二の人生後半に制作された、当時は商業美術や生活芸術と呼ばれた範疇のデザイン作品に目を向けて、夢二式美人画の方程式に並ぶ、夢二流デザインの手法があったのかを模索する。

2018年5月から7月にかけて、東京ステーションギャラリーにて「夢二繚乱」展が開催され、多くの来場者で賑わった。千代田区の出版社龍星閣が、夢二の作品群を千代田区に寄贈し

たことを記念して開催されたもので、500点以上に及ぶ展示品が並べられた。夢二関連の展覧会としては過去最大級の規模を誇り、夢二ワールドの今も根強い人気を物語っている。

竹久夢二に関する美術館は、日本国内において現在5館を数えている。年代順に、1番目が昭和56年（1981）群馬県に開館した竹久夢二伊香保記念館、次いで昭和59年（1984）出世の地である岡山県に開館した夢二郷土美術館。3番目には平成2年（1990）東京本郷に開館した竹久夢二美術館、4番目が平成10年（1998）栃木県に開館した日光竹久夢二美術館、そして5番目が平成12年（2000）石川県に開館した金沢湯涌夢二館である。夢二の人氣が時代を超えて、今もなお健在である事の証と言えよう。

本研究では竹久夢二美術館と、金沢湯涌夢二館の2館を訪問して、調査研究を行った。また、東京ステーションギャラリーで開催された「夢二繚乱」展を見学し、千代紙の版元「いせ辰」（1864年江戸末期創業、東京谷中本店）、和紙「榛原」（はいばら、1806年江戸文化3年創業、東京日本橋本店）も合わせて訪問した。

2. 夢二式美人

明治末から大正、昭和初期にかけて、夢二の描く美人画は「夢二式美人」と呼ばれ多に人気を博した。その特徴として図1に示すように、大きな黒い瞳におちよぼ口、わずかに首を傾け華奢で郷愁に満ちた女性と表現されている。前述の高橋『竹久夢二



図1 港屋絵草紙店 大正3年（1914）
木版 金沢湯涌夢二館

社会現象としての『夢二式』では、次のように述べられている。

竹久夢二の絵を説明するときには、今でも当たり前のように「夢二式美人画」の言葉が使われている。線の細い異常なほどすらりとしていて、よじれた体。不釣り合いなほど大きな手足。伏し目がちで物憂げな表情。夢二式美人画の特徴を挙げてみればそんなところであるが、それはあくまでも夢二の描く美人画の特徴であって、『夢二式』という言葉の説明としては足りないような気がする。

以上から、夢二式は日本画で描かれた美人画を指すのみならず、当時の流行や美術趣味も含めた社会現象としての表現であることが、うかがえる。言い換えれば、夢二の作品としてのアートやデザイン、その時代背景や生活様式への影響など全てが、夢二式の中に含まれていると考えられる。「夢二式美人」という言葉については、夢二自らの文章中にも「夢二式の女」という言葉が出てくる。

3. 夢二流デザイン

3.1 夢二流デザインを探る

グラフィックデザイン先駆者としての竹久夢二の作品群は、千代紙や半襟のパターンデザイン、絵封筒や葉書などの文具、本の装丁、楽譜の表紙デザイン、イラスト制作など多岐に及ぶ。美人画を題材にしたポスター制作や、明治ミルクキャラメルのパッケージ、チョコレート菓子の広告など、企業イメージの発信に関わるコーポレートアイデンティティの分野でも活躍した。昭和初期には、化粧水へチマコロンの公告に夢二作のイラストと唄が掲載されている。フルーツパーラーの先駆けとなった銀座千疋屋や三越の広報誌も手掛け、グラフィックデザインの領域は広範囲に及んだ。夢二人気を支える女性と子供をターゲットに、活躍の場が広がっていたことも興味深い。

本稿では、夢二デザインの千代紙で人気の高

い3点のパターングラフィック「大椿」「マッチ」「ヒガサ」を取り上げ、作品を読み解きながら、夢二流デザインの手法を探る。

3.2 千代紙「大椿」

夢二は椿をモチーフとした絵を幾度も描いており、書籍の装丁や千代紙のパターン、詩歌にも好んで取り上げている。夢二生誕の地である岡山県邑久郡本匠村の生家から、山一つ隔てた国司丘（くにしがおか）は、椿が咲き誇る場所であり、母の里の美しい光景が幼心に刻まれていたのであろう。

椿の作品は、大輪の赤い椿と緑色や黒の葉のコントラストにより、大胆に描かれているものが多い。花の形状は、切り絵風に抽象化された表現で、夢二独自のモダニズムを感じさせる。TUMABIKI『桜さく嶋 春のかはたれ』口絵、明治45年（1945）3月20日（初版）では、三味線を弾く夢二式美人を右側画面からはみ出すように、その手前左には大振りの椿柄の布団が山高に描かれ、画面の4分の1ほどを占めている。椿の大きさが美人の顔と同じくらいの量感で、背景の海に沈みかける夕陽と、ほぼ同じ大きさである。夢二独自の遠近法で、ふっくらと大きな椿をダイナミックに配置して、躍動感のある構図となっている。

図2のように、HARU/NATU/AKI/FUYU『ねむの木』口絵大正5年（1916）NATUの部分では、少女が椿柄の布団にすっぽりと包まり、幸せそうに夢を見ているかのような表現がされている。布団は、前述のTUMABIKI口絵同様、こんもりと高く描かれている。夢の中の少女の



図2 HARU/NATU/AKI/FUYU（『ねむの木』口絵）大正5年（1916）NATU部分

周囲には、青い釣鐘草が左右対象にあしらわれており、当時パリで流行のアール・ヌーボーの流れを感じさせる。人気のポスター画家ミュシャの表現にも通じるところがある。生活シーンのひとコマに夢二得意の遠近感を用い、童謡をローマ字のタイポグラフィで表現した作品は、今もモダンで美しい。「かわいい」と言う表現の方が、的確かもしれない。夢二の作品には、この *kawaii* が散りばめられており、その感性が今も人気の要因と考える。

セノオ楽譜のひとつ「歌劇 椿姫」大正 7 年（1918）7 月 25 日（再版）では、女性の真っ赤なドレスに椿の花が白抜きでドット柄のように描かれ、雌しべは黒の線画で表現されている。背中が V 字で大胆にカットされたドレスの赤と、ストールの緑色がコントラストをなし、シャープな表現が美しい。手摺に両手を添えながら男性を見つめる眼差しとその横顔が印象的で、髪に巻いた緑色の布が風になびいている。手摺の前後に樹木の枝が降りかかり、その空間には風が感じられる。夢二の遠近法が巧みに描かれ、物語性を表現している。

子供向けの本『お伽パラダイス』著者：いわ谷小波、発行所：修文館、大正 14 年（1925）の表紙では、椿の樹木を中心に据えて 8 人の子供と 2 人の大人が手を取り合い輪を成す様子を、斜め上から覗くような視点で描かれている。着物姿と洋服姿の子供がいるのは、その時代の日常生活を表しているのであろう。左右対称に描かれ、樹木が本の背表紙になるよう装丁されている。表紙左上の長方形枠の中に書名・作者名が記され、文字の前面に振りかかるように椿の枝が配置され、葉がせり出している。立体感のある機知に富んだ構図は、夢二ならではのモダンニズム表現であると考えられる。

千代紙の作品「大椿」図 3（1914～1915 年ごろ）は、赤い椿と藍色の葉が美しいコントラストを構成している。黄色と白の雌しべをアクセントに、薄茶色の緩やかな曲線の枝ぶりと合わせて、リズムカルな表現である。椿の花を大胆に単純化した切り絵風の不定形の円で表現し、青い葉



図 3 千代紙「大椿」（みなとや版）1914-1915 年頃
京都国立近代美術館蔵



図 4 黄金比の長方形により部分を抽出

との対比が実に爽やかで、立体感も感じられる。全体は、11 個の花と 22 枚の葉によって構成され、リズムカルなデザインは部分的に切り取ってもバランスが良い。葉は中央の葉脈 1 本のみを白抜きで表現し、椿の葉の分厚さを軽やかに表現している。葉の彩色を、緑色ではなく藍色にしたところが、夢二流のモダンデザインと言えよう。

図 3 に示すように、全体の構図は 1 対 1.618 の黄金比の長方形に収められている。版木のサイズであったのか夢二の指定なのかは、未調査である。図 4 上段に示すように、黄金比縦型の長方形で抽出してみると、縦位置で、左下・左上・右上それぞれに均整のとれた美しい配置である。図 4 中段は黄金比横型の長方形で、下半分、上半部から抽出してみた。さらに図 4 下段は黄金比縦型の長方形で抽出右下、左上を抽出したもので、こちらも美しく均整が取れている。パターンデザインとしての完成度の高さが、認められる。

3.3 千代紙「マッチ」

日本古来の伝統的な千代紙のモチーフに、マッチ棒という近代的な日用品を取り上げ、鮮やかな色彩でリズムカルに描いたのが、千代紙

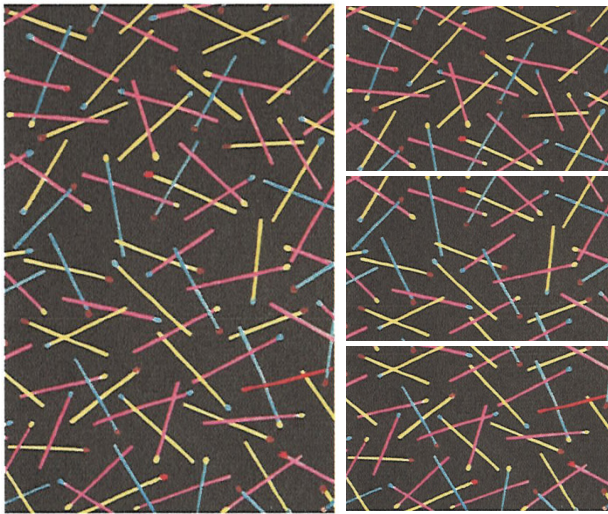


図5 千代紙「マッチ」（いせ辰版）1920年代 いせ辰蔵

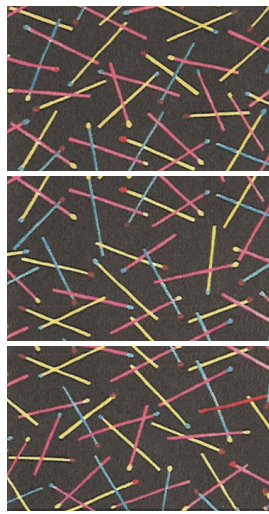


図6 黄金比の長方形で上部・中間部・下部を抽出

「マッチ」である。図5に示すように、軸を黄色や青、ピンクで表現し、頭薬部分は、茶色や赤、黄色、青で表現した。ベースカラーを黒にすることで、黄色やピンクが蛍光色のように効果的に浮かびあがって見ると共に、華やかで楽しい印象である。

図6のように、黄金比横型の長方形で上部、中間部、下部を抽出してみた。それぞれにバランスが良く見事なレイアウトである。また、絶妙なマッチの角度とバランスは、リズム感があって美しい。夢二の秀逸なリズム感やバランス感覚は、元来の感性と共にセノオ楽譜に携わった経験に寄るものと、筆者は考える。

当時は、デパートの先駆け三越や、千疋屋フルーツパーラー、その他カフェなどで広告用のマッチが盛んに使用されていた。箱のラベルデザインはモダンで洒落たものが多く、それらに夢二が触発されたのではないかと推測する。

3.4 千代紙「ヒガサ」

どんたく千代紙として10種類作られた中の一つが、千代紙「ヒガサ」である。当時、モダンな女性のお洒落アイテムのひとつが日傘であった。『女学生』7月号「白浴衣」表紙、大正12

年（1923）7月では、水色に白い模様の浴衣を着た女性が、紫色に花柄の入った日傘を差している。「夏の日」や「湖畔の秋」、「パラソルの春」など、夢二は日傘を用いた口絵やイラストを、たびたび描いている。

傘の起源は四千年ほど前とされ、当初は貴婦人や高層が使用する日傘として、ステータスシンボルであった。明治初期には日本でも製造されるようになり、高級品が一般庶民にも広まった頃に、夢二がモチーフとして取り上げたのであろう。印象派の巨匠、クロード・モネが1875年に描いた「散歩、日傘をさす女性」に影響を受けたか定かではないが、夢二は常に海外の情報入手に努めていた。

千代紙「ヒガサ」図7では、明るく透明感のある傘の配色と、斜めの角度に配置したリズムカルな表現が特徴である。赤と紫の傘、黄・青・桃色の傘と、2種類の色彩の傘が横位置で並び、それぞれの左下にはグレーの傘がシルエットで描かれている。

新しいグラフィックデザインの手法とも言えよう。日傘を小さな扱いで斜めのレイアウトにした点が、夢二流の洒落っ気であると考えられる。前述の「マッチ」に比較すると、「ヒガサ」のサイズ感は、とても小振りがかわいらしい。両者ともに、心地良いリズム感と調和を感じる。



図7 千代紙「ヒガサ」（いせ辰版）1920年代 いせ辰蔵

3.5 夢二流デザイン手法

夢二の美人画には、大きな黒い瞳におちよぼ口、わずかに首を傾け郷愁に満ちた女性といっ

た特徴が共通して見られ、「夢二式美人」の方程式が存在した。では、彼のグラフィックデザイン作品に対する方程式が見つかったかと言えば、研究の初期段階であり断言することは難しい。本稿で取上げた千代紙の3作品をはじめ、夢二関連の作品調査で、以下のような特徴が見られた。

- 1：遠近法による立体感のある構成
- 2：ゆらぎのある風の流れ
- 3：詩を感じさせる物語性

まず遠近法については、前述の『お伽パラダイス』表紙に見られるように、樹木を中心としてそれを囲む子供たちの輪を斜め上方からの視点で描き、立体感のある構成としている。その他の作品にも立体的な構図を巧みに使った表現が多く見られ、夢二独自の遠近法は大きな特徴と言えよう。

次に、ゆらぎのある風について前述のセノオ楽譜「歌劇 椿姫」に見られるよう、スカーフや風の流れを見事に描いている。世界的にも人気を誇るジブリのアニメーションは、風になびくスカートや髪の毛のさかだつ様子など、一瞬一瞬の動きを見事に表現していると言われている。両者共に、奥行感のある構図と風を感じる表現が特徴であると、筆者は考える。



図8 浅間丸メニュー 昭和4年(1929)

図8 浅間丸のメニューデザインは、美人画の夢二と、商業美術の夢二が、融合された好作品と言えよう。豪華客船「浅間丸」のために芸妓のだらり帯に「松」、赤い着物に「梅」、七夕飾りに「竹」を配して「松竹梅」の華やかで雅な意匠とした。七夕飾りの短冊が風に揺らぐ

様子は心地良い微風を誘い、美風と表現しても良いのではないだろうか。ゆらぎ、ゆらぎF分の1についての言及は次の機会に譲ることとするが、デザインとゆらぎの関係性は、たいへんに興味深い。



図9 APL・FOOL (『婦人グラフ』第3巻第4号表紙) 大正15年(1926)4月

3番目の詩を感じさせる物語性について、図9「APL・FOOL」を例に挙げる。夢二式美人が物憂げな様子で、手元の写真かメモ帳のようなものをもて遊びながら、物思いにふけっている。着物の柄としてはめずらしいサクランボを配した赤い着物に、当時流行のカフェのエプロンは、モダンな印象の女性である。奥の開いた扉から入ってきたのか、黄色いジャケットに蝶ネクタイ、山高帽のジェントルマンが、片手に一輪の花束を持って立っている。最初に絵を見たときには目には入らないが、よく見ると真ん中の黄色い照明の奥に立つ男性は、手前の夢二式美人が想い描いている人なのか、さもなくば偶然に訪れたのか、エイプリル・フールの題名から考えると何か訳ありげのようである。

夢二は、もともと詩人である。「待てど暮らせど来ぬ人を」の始まりで知られる夢二作詞の「宵待草」大正7年(1918)は、大ヒット楽曲となった。大正5年(1916)セノオ楽譜「お江戸日本橋」の装丁を皮切りに、夢二が手掛けた楽譜デザインは、15年間で270点にもおよぶ。当時は、雑誌よりも楽譜が手頃な価格(20~30銭)であったため、少女たちもこぞって買い求めたと言う。

音楽という目には見えないものを見える形に表現したグラフィックデザイン、言うなれば情報の見える化としての、情報デザイン草分けとも言える。夢二の絵やデザインの中に表現された心地よいリズム感、彼独自の才能であった

と共に、楽譜デザインを通して培われたとも言えるのではないだろうか。

大正3年（1914）、東京日本橋「港屋絵草紙店」の開店は、夢二の理想とした美術と生活の向上、日常生活における美術趣味を具体化する最初の試みであった。それは、

雑誌や絵葉書、版画、千代紙や半襟など、身近でささやかな日用品の中に展開された。『竹久夢二かわいい手帖』によれば、“かわいい” kawaii は、大正乙女のファンシーショップ「港屋絵草紙店」から始まったとされる。図10に示すように、チラシ「港屋の売り出し」には「美しいもの可愛いもの不思議なもの とりわけ半襟・羽子板・人形・絵草紙」の記載がある。Kawaii は世界共通の日本語のひとつであり、21世紀に入って世界に最も広まった日本語とも言われる。夢二のデザインには、この kawaii が散りばめられており、今も人気を博す理由の一つと考えられる。

夢二は大正12年（1923）に恩地孝四郎らと「どんたく図案社」設立を企画するが、関東大震災でその夢は計画倒れとなってしまった。夢二は、図案家つまりグラフィックデザイナーとして仕事を確立し、画家人生をシフトしようと考えていたのかもしれない。

4. グラフィックデザインの先駆者

竹久夢二は、詩人、画家の業績に加えて近代日本モダンデザインの先駆者とも言えよう。明治初期に使われた「図案」という言葉が、次第にデザインへと移行し、生活美術や商業図案、商業芸術と言われていた領域が、グラフィック



図10 チラシ「港屋の売り出し」大正3年（1914）千代田区教育委員会蔵

デザインという分野を生み出していった。三越呉服店に図案部が設置されたのが明治42年（1909）、資生堂意匠部は大正5年（1916）で、高島屋図案部や三省堂図案部も、ほぼ同時期に設立された。

杉浦非水（すぎうら・ひすい、1876-1965）は明治9年愛媛県松山市に生まれ、日本画家に師事した後、上京して東京美術学校（現東京藝術大学）日本画科に入学した。在学中に黒田清輝と知り合い、黒田の渡仏みやげヨーロッパで当時大人気であったアール・ヌーボー様式の図案に心奪われたという。明治36年（1903）に創業した三和印刷の図案部主任となった非水は、内国勸業博覧会の雑誌「三十六年」の表紙に日本初のアール・ヌーボー様式の図案を描いた。

明治38年（1905）には東京中央新聞社に入社、3年後には三越呉服店図案部の嘱託となった。昭和10年（1935）、帝国美術学校（現武蔵野美術大学）から分かれた多摩帝国美術学校（現多摩美術大学）を創立し、初代学長として図案科主任教授を務めた。

明治から大正時代にかけての百貨店は、ハイカラで最先端の空間であり、特に1904年「デパートメント宣言」を発表した三越（当時は三越呉服店）は、つぎつぎと新しいことを始める革新的な百貨店であった。そんな三越のブランドイメージの確立に大きな役割を果たしたのが非水であり、嘱託の図案家としてPR雑誌『三越』の表紙絵やカット・ポスター・はがき・着物・緞帳の図案にいたるまで一手に引き受けた。「三越の非水か、非水の三越か」とささやかれるほどで、三越のブランディングデザインに貢献した訳である。『三越』の表紙絵は、非水が外遊した際に、夢二が手掛けている。

年代を追っての事実から判断するならば、商業デザインの確立者でありグラフィックデザイナー日本の第一号は、杉浦非水であると言えよう。しかしながら、夢二が近代日本のモダンデザイン開花の一翼を担ったことは、間違いのない事実である。時代や生活に大きな影響を与え

今なお愛され続けていることは、揺るぎない事実である。

2017年4月から6月には愛媛県立美術館所蔵「杉浦非水—モダンデザインの先駆者—」が、京都市の細身美術館で開催された。一方、兵庫県の明石市立博物館では、2019年1月新春特別展として「大正ロマン—グラフィックデザイナーの原点 竹久夢二展」が開催予定である。夢二と非水の比較は別の機会に譲るとして、近代日本デザイン史の幕開けに、両者の名前が刻まれたことは間違いない。

夢二の心地よい空間表現と、いい加減さ、はかなさ、ゆったりずむが、多くの人々に受け入れられたと、筆者は考える。検証するには及んでいないが、非水のプロフェッショナルなデザイナーとしての仕事感とは異なる、プロではあるが、そこはかたない人間の不完全さを残したところが、夢二最大の魅力であると感ずる。

夢二は、主に3人の女性たちに大きな影響を受けて、50年の人生を送ったとされる。1番目の女性は、妻「たまき」（本名：岸他万喜）である。たまきの前夫が日本画家であったことから、専門的な美術学校出身ではない夢二が、たまきに絵の手ほどきを受けて才覚を發揮させたと言われている。もともと絵葉書屋「つるや」を営んでいた彼女の離婚後の生活のために、夢二のブランドショップ「港屋絵草紙店」が創設された。2番目の女性は、「彦乃」（本名：笠井彦乃）である。彦乃を「やま」、夢二を「かわ」と呼んでの大恋愛は『山によする』に描かれている。25歳の若さで天に召された「彦乃」が、夢二最愛の女性であったとされている。3番目の女性が、モデル「お葉」（本名：佐々木カ子ヨ）であり、彼は夢二式美人をお葉に求めると同時に、生活スタイルにも夢二式を求めたと言う。代表作「黒船屋」は、お葉がモデルとなっている。

夢二の絵やデザインには、「ゆらぎ」がある。人間味とも言えよう。空間が存在し、微風が流れ、物語性を感じる。それは、彼の生涯に大きな影響を与えた3人の女性たちとの生活体験や、

あるいは京都や金沢、伊香保などさまざまな土地を訪ねて旅を重ねた、経験値が生かされた結果とも考えられる。

5. 考察と今後の課題

19世紀のイギリスの詩人、デザイナーでもあり、マルクス主義者として活躍したウィリアムモリス（1834-1896）は、「モダンデザインの父」と呼ばれる。モリスは、生活を気に入ったもので満たすよう提唱しており、夢二が理想とした生活芸術の考え方との共通点を感じる。モリス誕生から50年後、夢二がモダンデザインの影響をモリスから受けていたであろうことを想定し、今後の課題とする。

また、前述の図2 HARU/NATU/AKI/FUYU『ねむの木』口絵に見られるよう、アール・ヌーボーに繋がる表現があることから、竹久夢二とアール・ヌーボーとの関連性についても研究を進めてみたい。建築家として知られるチャールズ・レニー・マッキントッシュ（1868-1928）は、スコットランドの建築家、デザイナーとして、アーツ・アンドクラフツ運動を推進した。マッキントッシュは、背もたれの高い椅子ヒルハウスや格子を表現した椅子ウィローチェアなどに、ジャポニズムを表現した。マッキントッシュと夢二に、アール・ヌーボーに関する何らかの接点があるのだろうか。アール・ヌーボーのグラスゴー派とも言われるマッキントッシュに対して、夢二はアール・ヌーボーの江戸派と呼べるのか、筆者の仮説を探究してみたい。

竹久夢二に関連する5つの美術館が出来ており、大規模な展覧会も人気を博していることは、大正浪漫の象徴としての夢二人気は今も衰えていないことの表れである。

「モダニズム」という言葉の定義について、触れておく。広辞苑によれば、「最新の趣味や流行を追う傾向。現代好み。」「哲学・美術・文学で、伝統主義に対して、つねに新しさを求める傾向の総称。近代主義。」との記載がある。

伝統主義（トラディズム）に対比する言葉、とも言える。夢二作品のモダニズム性に関する側面には及んでいないが、論考を深めたい分野である。

100年の時代を越えて、今もなお愛され続ける夢二のデザイン。その理由の一つが、「ゆらぎ」であると筆者は考える。また、世界的にも共有されるkawaiiが好まれる理由を解明し、ゆらぎ感と共にその法則性が見出せるなら、今後のヒット商品創造につながる。簡単なことではないが、感性デザインの方程式が明らかに出来るなら、商品開発や地域のブランディングに役立つことが、多いに期待される。

謝 辞

金沢湯涌夢二館の太田昌子館長には、資料収集や研究の方向性に対する的確なアドバイスを頂戴した。また小松公立大学、横川善正副学長にも、ご指導を賜り貴重な資料を貸していただくことが出来た。両先生に心より感謝を申し上げたい。八戸工業大学平成30年度特別助成の機会を与えていただき、研究を進めることが出来たことを記して、感謝を申し上げる。

参考文献

- 1) 高橋律子：竹久夢二 社会現象としての〈夢二式〉, ブリュッケ, 2010.
- 2) 金沢湯涌夢二館収蔵品総合図録 竹久夢二, 公益財団法人金沢文化振興財団金沢湯涌夢二館, 1996.
- 3) 竹久夢二美術館—その美と愛と悲しみ—, 一般財団法人鹿野出版美術財団竹久夢二美術館, 2011.
- 4) 石川桂子・谷口朋子編：竹久夢二 大正モダン・デザインブック, 河出書房新社, 2003.
- 5) 石川桂子編：竹久夢二かわいい手帖 大正ロマンの乙女ワールド, 河出書房新社, 2017.
- 6) 「夢二繚乱」展図録, 千代田区/東京ステーションギャラリー/株式会社キュレイターズ, 2018.
- 7) 小川晶子：もっと知りたい竹久夢二 生涯と作品, 東京美術, 2009.
- 8) 竹久夢二美術館監修：夢二の色 竹久夢二を魅了した7つの色彩ブック, 東京美術出版社, 2014.
- 9) 内山武夫編集監修：モダンデザインの父 ウィリアム・モリス, NHK 大阪放送局/NHK きんきメディアプラン/ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館, 1997.
- 10) 高橋律子：「図案」から「デザイン」へ—イラストレーションと手芸の「図案」をめぐる考察, 2007.
- 11) 松山の謎「日本初のグラフィックデザイナー—杉浦非水」
<http://www.dokidoki.ne.jp> 2018年11月28日アクセス

要 旨

竹久夢二（1884～1934）は、大正浪漫を象徴する画家、詩人として活躍した。郷愁を帯びた夢二の美人画は「夢二式美人」という言葉が生まれるほど、流行や文化に大きな影響をもたらした。その一方、千代紙や絵葉書、半襟など生活小物のデザインを手掛け、夢二のブランドショップとも言える「港屋絵草紙店」を立ち上げ、人気を博した。当時は、商業美術や生活芸術の領域とされた夢二のグラフィックデザイン作品に着目し、夢二流デザイン手法を解析することを、本稿の目的とする。そこには、デザイナー夢二独自の遠近法による立体感、ゆらぎのある風の流れ、詩を感じさせる物語性などが、浮かび上がってきた。

キーワード：竹久夢二, 大正浪漫, グラフィックデザイン, デザイン手法